



滋賀医科大学 学際的痛み治療センターの取り組み



滋賀医科大学医学部附属病院
ペインクリニック科 病院教授

福井 聖 先生

1982 年 山口大学医学部 卒業
1996 年 滋賀医科大学麻酔科 講師
2008 年 滋賀医科大学付属病院
ペインクリニック科 病院教授

福井聖先生は、国公立大学の附属病院として初となるペインクリニック科の設立（2007 年）に携わり、後進の育成・指導に注力してこられた。また、2013 年に厚生労働省の慢性の痛み対策研究事業の一環として設立された「滋賀医科大学医学部附属病院学際的痛み治療センター」で難治性慢性疼痛について多くの研究を行うとともに、新たな治療法の開発等にあたってきた。慢性疼痛の臨床と研究の第一線で活躍する福井先生に、日本における慢性疼痛の現状や課題、同センターにおける取り組みなどについて話をうかがった。

——聞き手：編集部

痛みには生物学・心理学・社会学 からのアプローチが必要

——そもそも「痛み」とは何なのでしょう。

「痛み」は、急性疼痛と慢性疼痛に分けられ、急性疼痛は体の警報システムとしての役割を持ち、脳が痛みを感じることで傷ついた箇所の安静を保ったり修復を促したりします。慢性疼痛は、3 カ月以上続く痛みで、何らかの原因で急性疼痛が慢性化したものです。神経システムの異常が引き起こす痛みであると考えられていて、器質的・機能的な要因に加えて心理・社会的な要因が関与していることが明らかとなっています。

最近では、IT 化によりパソコンやスマートフォン、タブレットなどの過度な使用が増えてきました。そうした生活習慣が異常な姿勢につながり、器質的かつ機能的な要因となって慢性疼痛を遷延化させるケースがみられます。また、慢性疼痛は、職場や学校、家庭、地域などでの人間関係といったさまざまな社会問題を背景とし、心理・社会的要因と器質的要因が複雑に絡みあっている場合がとて多いのです。そのため、患者が訴える局所の痛みで固執した従来の生物医学的アプローチでは良好な結果が得られないことがあります。そこでいま慢性疼痛治療に求められているのは、慢性疼痛を心と体の問題として捉え、生物学・心理学・社会学の各方面からアプローチを行うことです。